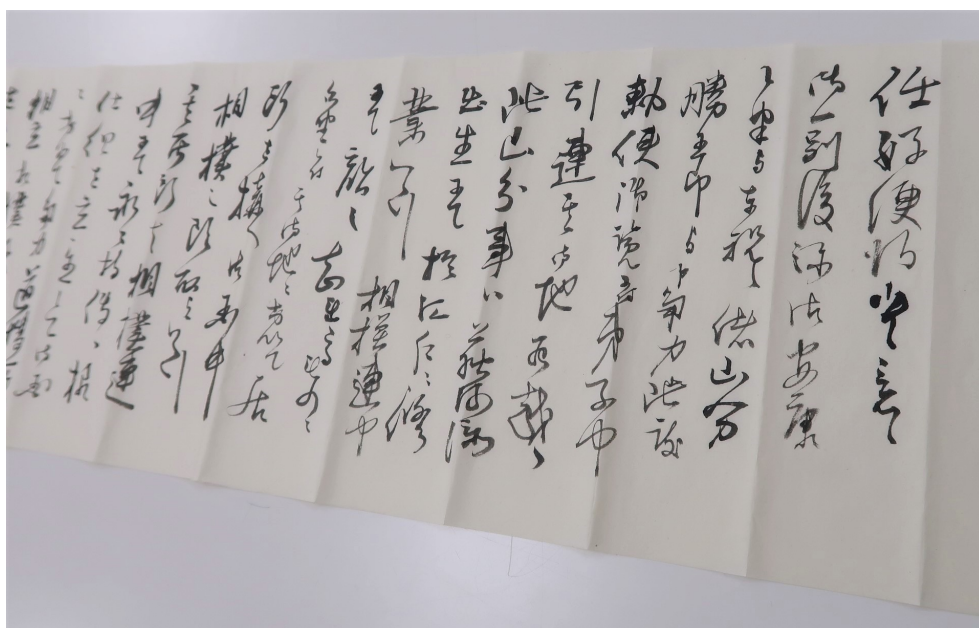




文書館資料

武芸・体育・
スポーツと

> 11

「麻田公輔書状写」（周布家文書747）

たたかう ②

幕末の諸隊力士隊と山分勝五郎（2）

～周布政之助の力士観～

《勅使上覧相撲》

文久3年(1863)7月、攘夷を実行した長州藩を激励するため、朝廷から勅使正親町公薫（おおぎまち きんただ）が派遣されました。

4日山口到着、そののち小郡～下関を巡見し、25日に三田尻に入った勅使一行は、予定が変更となり日程に余裕ができていました。そこで長州藩は、勅使を退屈させないよう、8月の5日間、山分勝五郎らによる相撲興行を計画、実施しました。場所は三田尻御茶屋。いわば「勅使上覧相撲」です。

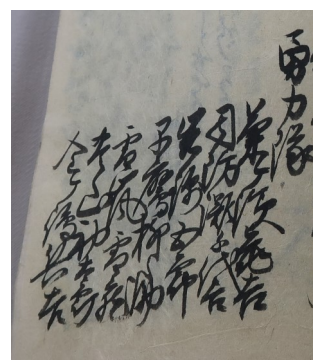
勝五郎らにすれば、「京都から来た偉いお公家さんの前での相撲興行」です。数ヶ月前には想像もできない栄誉を感じたでしょう（毛利家文庫1雲上58「勅使正親町少将卿御下向一件」）。

《周布政之助の力士観》

勅使上覧相撲直前の7月晦日、当時の藩政府の中心人物周布政之助（麻田公輔）が、三田尻町の大商人貞永正甫に送った書状の写が残されています（上の写真）。周布は、勅使上覧相撲のため勝五郎らが三田尻に来ていること、この機会に勝五郎を「御国中相撲之頭取」とし、宮市あたりに「角力道場」を設けたいので協力してほしいと伝えています。

周布は、「角力道場」を設け相撲好きの者の生業とすれば、見物人も歓び、気持ちも奮い立つだろう。相撲は「我皇国」の「一種之技倆」なので、廃れないようにしなければいけないと言います。そして、上方や九州との往来の地である宮市に「角力道場」を設ければ、「皇国中」の相撲取たちとも連絡が付けやすく、道場も存続できるとしています。

その一方で、「角力道場」の設立は藩



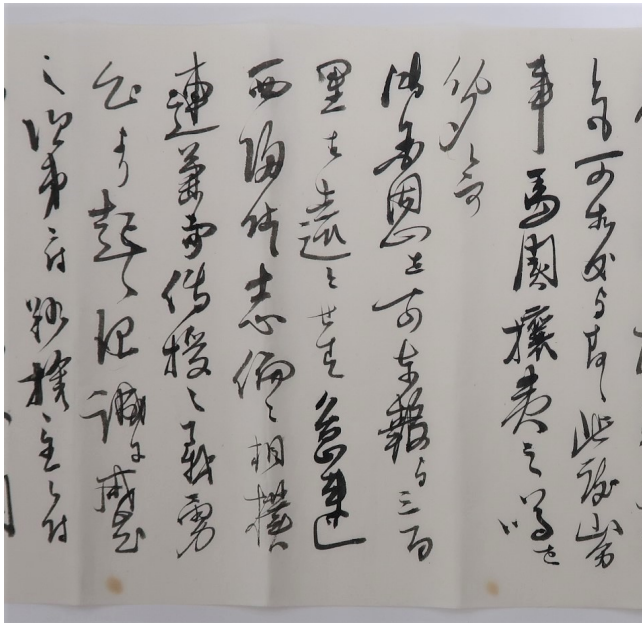
力士隊と勇力隊

勝五郎が頭取を務めた力士隊（角力隊）とは別に、相撲取や体格のよい若者で構成された勇力隊もありました。『もりのしげり』は力士隊が勇力隊に改名したと説明しますが、「両公伝」は力士隊と勇力隊は本来別の隊としています。「両行伝」の説明が妥当と考えられます。力士隊（角力隊）は慶応2年2月頃まで確認でき、のち「勇力隊」に合併されたようです。

内の人々の気持ちを奮い立たせ、「攘夷之一助」になるとも言っています。周布は、今後予想される攘夷戦を視野に入れ、相撲取のような体格のよい、運動能力の優れた若者を集めること、相撲興行を通じて藩内の人々の戦意を高揚させること、それらを意図して勝五郎の「御国中相撲之頭取」への取立、「角力道場」設立を計画しています。「来るべき攘夷戦のための相撲利用」といっては言い

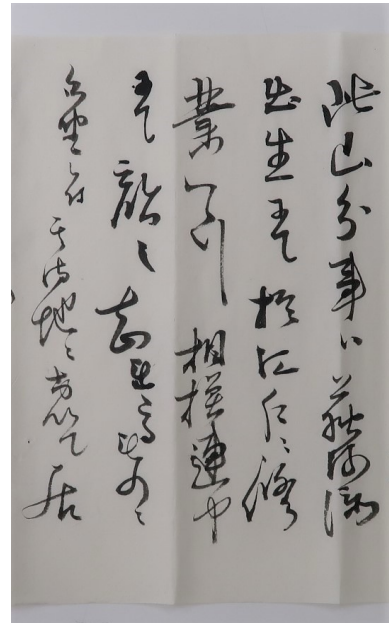
すぎでしょうか。

急速な時代の流れの中、計画は実現しませんでした、藩内の相撲取や体格のよい若者の募集は実施され、力士隊とは別の隊、勇力隊の結成にもつながったようです。勇力隊は干城隊（家臣団から選抜された藩士で構成された隊）に附属し、当初は宮市に屯集しています。



【勝五郎の行動を賞賛している箇所】

「このたび山分勝五郎は下関での攘夷決行のうわさを聞き、自分も御国恩に報いようと300里の距離をものもせず急ぎ帰国した。その志は相撲取の義勇心から出たもので、まことに感心だ」と絶賛しています。



【勝五郎の経歴について語った箇所】

「山分勝五郎という人物は、萩河添の出生で、江戸で相撲の修業をし、相撲連中にも顔が知られた者」とあります。結構有名な人だったようです。

任好便得貴意候、御一別後弥御安康候半と奉悦候、山分勝五郎と申角力、此度勅使御覧に付、弟子中引連其御地罷越候、此山分事ハ萩河添出生にて、於江戸ニ修業いたし、相撲連中にて顔之しれたるものニ御座候付、其御地ニおいて居所を構へ、御国中相撲之頭取といたし、其居所者相撲連中にて永々持伝候様仕組せ立置候て、御国ニおゐて角力道場一ヶ所相立、相撲好き之もの其業を成就し、見物人者目を悦ハし、心を勇ませ候手段にも可相成候、相撲も我皇国ニ在候て一種之技倆、永々瘦棄ニ難至事ニ付、御国中ニおゐて道場一ヶ所ハ構へ置候而可然候付、思召次第ニて御世話被成候様ニと存候、貴兄思召寄無之候ハ、此書状を岡本三右衛門江被成御見せ、三右致新門考、其御地にて富家之内相撲好き之人江被申談、致世話候様御周旋可被下候、三田尻宮市辺ニて相撲道場を構へ置候得者、上方・九州往来之地ニ付、皇国中相撲達と響応いたし候ニ便利ニ付、自然と永続も可相成と相考候、是亦御国中之氣力を励せ候儀ニ付、攘夷之一助とも可相成と存候、此度山分事、馬関攘夷之噂を聞候而、御国恩を可奉報と三百里を遠とせず、急速西帰仕候志、偏ニ相撲連兼而伝授之義勇心より起候儀、誠に感心之次第ニ付難捨置ニ付、得御意候間、何卒御周旋被下候様所希ニ御座候、此段三右江も被伝談可被下候、不能申、時下御加愛專一二候、忽々頓首

（文久三年一八六三）

七月晦日

貞永老兄

左右

（後略）

（麻田公輔ニ周布政之助）
公輔